

202107 口語詩句 7 月総評 龍 秀美

短詩では、伝統的な定型でないことによって新しい可能性が開かれることがあります、難しいのは、その作品が単独で一人歩きをするとき、どんなところにポツンと置かれても「文学作品」という独立性を持っていることでしょう。それはその形、スタイルがゆるがない必然性を持っているということではないでしょうか。

短歌、俳句、川柳などの多様な遺産を取り込んでいく口語詩句の可能性は、また、それらの縛りからも自由でなければならぬはず。今月はその困難を考えながら選びました。

紫陽花を亡子の脳と思うまで

作者 長谷川柊香 宮城県

——こんもりと小さな単位が集まっているもの。匂やかで愛おしいもの。凝る意識はどんな遠いところからでも幻視を引き寄せます。

指鉄砲撃って

わずかに

蝶

しずむ

作者 長谷川柊香 宮城県

——前句「紫陽花～」は俳句ですが、この詩句は行分けによる時間差が幻視を生むということによって、口語詩句なのでしょう。「蝶」が一角沈んでいるのも繊細です。

吊り橋から川を覗き込む彼がいる

私は浮気されてる事を知っている

作者 まちりこ 埼玉県

——何気ない素振りに現れる真実。危ういつり橋から何を見ようとしているのだろうか。3行の空白が示す限りない距離。空白の価値を最大限に引き出すのも口語詩句の魅力です。

丸々と粒を湛えた玉蜀黍をもぐ

子供の頃故郷で聞いた

鶏の骨を折る音がした

作者 広田 土 大阪府

——田舎ではよく「庭野菜」と言われて、事があれば御馳走となっていた鶏。首の骨は玉蜀黍と同じ音がする。食べるということの、あっけらかんとした命の音。調べを尊ぶ短歌などでは異質の素材かも？

三途の川は

バタフライで渡ると

決めている

作者 まちりこ 埼玉県

——私もそうすることに決めました！キツパリ元気に。

帰り道「じゃあまたね」って言い

合えばああ誰にでも生活はある

作者 白野 新潟県

——別れるときの小さな寂しさ。それぞれの生活はあなたとわたしがどこまでも違う人間であるという証し。

「活動家」僕らの声を悪めかし

動きを縛る「一般市民」

作者 加藤悠 愛知県

——恣意的に「名付ける」ことの危うさ、罪深さと、それを増幅するマスコミやネットの世界。アフォリズムにも通じるか。

娘の名前をひらがなで呼ぶ母

作者 まちりこ 埼玉県

——文字と音の関係の不思議を想像させる作品です。「ひらがな」で呼ぶ母の声が変化することがあるのか。そしてその時は？完結を敢えてさせない歌。

あやふやに揺れる世界が

不意に濃密になる所

例えば

赤ん坊に握られた指先とか

作者 春町 美月 大阪府

——それがそのようであること、それ以外でないこと。その時「濃密」という言葉が新しい意味を帯びる。

鳥と狼が協力して狩りをする

驚くべき事実だけど

今する話じゃ

ないんだろうな

作者 春町 美月 大阪府

——よくある驚くべき事実でしょう。うかうかしていると思いがけない方向から弾は飛んでくる。いま現在の話と思いますが。

くちばしのまるい折鶴

へビイチゴ

たんぽぽの束

点滴チューブ

作者 翠 東京都

——点滴の滴のようにゆっくりとさり気ない、祈りに満ちたモノたち。

自己と 他社

作者 立花ばとん 東京都

——私性と社会性、これらは生きる営みの中で不意に裏返ることもあるでしょう。

弟の携帯の表示に

姉一号 姉二号 と

映し出されるのをみた

姉二号です

作者 加藤 美紀 愛知県

——家族というしがらみから離れたい若者の気持ちも分かりますね。愛情の裏返しかも。

生きるとか死ぬとか氷店に旗とか

作者 大橋 弘典 群馬県

——風にゆれる「かき氷あり☑」の旗。ふっと解き放たれる思い。

立ってても手伝ってても鉄製の

手すりを掴む手の暖かさ

作者 立花ばとん 東京都

——介添えをする方もされる方も人の手。だから同じ温かい頼もしさが、鉄の冷やかさと対照的です。。